

<<口頭発表>> (3月18日 10:00-10:30)

【F棟3F F303教室】

多言語政策を通じた集団間関係の形成をめぐって
—ボリビア東部低地チキタニア地方におけるベシロ語教育政策と政党争いの分析から—

中野 隆基

本発表の目的は、多言語政策に関する公文書と政策が施行されている当地で行ったインタビュー・参与観察から得たデータの分析から、その施行過程と様々なレベルの集団間関係を形成する政党対立の相互作用を明らかにすることである。それにより、多言語政策下での各書記言語の統一化・普及政策による書記言語学習者と地域変種使用者の対立の形成という言語政策研究のテーマに(King, 2001)、政党争いによる社会集団や言語観の対立の形成、という視点を導入したい。対象としては、南米ボリビアで2009年に公布された憲法とその後の言語教育政策関連法、低地先住民言語ベシロ語(別名チキタノ語、マクロ・ジェ語族、話者数約4600人、同地に居住する先住民チキタノが使用するとされる)の復興・普及・発展を推進する国の機関の代表者の語り、そして参与観察から得たその施行過程の実情を主に取り上げる。

<<口頭発表>> (3月18日 10:35-11:05)

【F棟3F F303教室】

言語の選別と淘汰をめぐるポリティクス
—南米、チキトスのイエズス会ミッションにおける言語政策とその帰結—

金子 亜美

南米大陸の発見以降、多くのカトリック系修道会が、先住集団への布教活動に取り組んできた。とりわけイエズス会は、植民地行政の中心地から遠く離れた集団への布教を委嘱されるなか、その地の多言語状況に様々な形で介入してきた。彼らの言語政策には、ある言語や言語的特徴を顕著なsalientものとして取り上げ、その他の特徴を消去するという、選別と淘汰のプロセスがしばしば伴っていた。本発表では、第一に、イエズス会の言語政策を方向づけた社会文化的背景を明らかにする。その上で第二に、その言語政策が今日、先住民言語の保護活動という文脈にまでいかなる影響を及ぼしているのかを論じる。議論の中心になるのは、現ボリビア多民族国の東部低地に位置するチキトス地方のミッションであり、そこでイエズス会が施行した「チキト語」の共通語化・文字化政策と、その長期的な帰結を明らかにしたい。

<<口頭発表>> (3月18日 11:10-11:40)

【F棟3F F303教室】

相互行為を通して示される在日外国人の文化的アイデンティティ
—IdentityとSubjectivityによる分析の試み—

ミラー 成三

本研究では、アイデンティティをIdentityとSubjectivityに区分し、日本に住む外国人が相互行為を通してどのような文化的アイデンティティを示しているのかを明らかにすることを目的としている。本発表においては特に、IdentityやIdentity表示の意識が、実際に示されるSubjectivityとどのように関わっているのかを、自然会話のデータとライフストーリーインタビューの二つのデータを用いて考察する。

分析の結果、インタビューで語られる自身のIdentityやIdentity表示の意識と、実際に表示されるSubjectivityに関連性が見られることが分かった。このような協力者のIdentity表示の意識の形成には、彼らが経験してきた接触場面における、ホスト側の接触規範が深く関連しているだろう。一方で実際の会話においてはインタビューで語られた意識とは異なるSubjectivityが示される場合も多い。これには様々な要因が関わっているため今後も分析を続けていく必要がある。

<<口頭発表>> (3月18日 11:45-12:15)
【F棟3F F303教室】

日本人であることが語られる文脈
—「中国残留孤児・中国残留婦人」のインタビューから—

時津 倫子

関東近郊在住の「中国残留婦人」「中国残留孤児」8名にライフヒストリーインタビューを行った。また、3名からは自筆の手記や自費出版された半生記を預かった。今回の分析対象は、2回以上のインタビューをした5名と、3名分の手記である。インタビューデータの中から、「日本人は／日本人だから」を含む文を取り出し分類した。マクロな観点(終戦, 中国での内戦, 文化大革命, 日中国交回復など)とミクロな観点(結婚, 帰国, 日々の暮らしなど)から整理し、「日本人であること」が筆者とのインタビューの中で語られる文脈を特定した。「中国人と結婚する」「差別される」「帰国する」といった個人的な経験と、「終戦と国交断絶」「文化大革命」「日中国交回復」「アメリカからの領土返還」といったマクロな事象が交錯し、「日本人である(から)～である／でない」という個人個人の日本人としてのアイデンティティが語られていた。

<<口頭発表>> (3月18日 10:00-10:30)
【F棟3F F310教室】

他称詞としての指示詞
—親族間の談話における運用—

小森 由里

親族内で他の親族に言及する他称詞として親族語、名前、姓に加え、「この子」などの指示詞が用いられる。本発表では、親族間の談話において指示対象が導入されてから指示詞の運用に繋がる過程に着目し、他称詞としての指示詞の運用実態に迫る。本研究では、和歌山県在住の一親族を対象に参与観察を行い、現場指示用法71例、非現場指示用法75例、合計146例の指示詞の他称詞を収集した。分析の結果、指示用法に応じてさまざまな違いがあることが判明した。現場指示の指示詞の他称詞は、唐突に用いられ対称詞で対象人物を特定後に用いられたりすることが多い。一方、非現場指示の他称詞は、対象人物が名前や親族語などで導入された後に運用されたり、談話の展開に応じて連続して用いられたりすることが多い。このような違いには、話題の人物が発話の場に同席しているか、話し手と聞き手が血縁の親族かという2点が関わっていると考えられる。

<<口頭発表>> (3月18日 10:35-11:05)
【F棟3F F310教室】

省略可能な二人称代名詞がもつ働きかけの意味の地域差

山本 空

現代日本語では特別な理由がない限り対称詞は省略されること、目上には二人称代名詞が使用できないことが一般的である。しかし、日本語方言の中には省略可能であるにもかかわらず対称詞を使用する地点が存在し、その多くは二人称代名詞であった。それらの中で、同等もしくは目下の関係の聞き手を責めるような場面に見られる用例(「威圧的働きかけの意味」を持つ二人称代名詞)は地域差なくあらわれるが、そうではない文脈であらわれ、聞き手に親密さを示し、目上にも用いられるような用例(「親密的働きかけの意味」を持つ二人称代名詞)は地域が限定された。これらの地域の談話には関西方言が持つ、自分の話題に聞き手を巻き込もうとする談話展開の特徴があらわれており、方言談話における省略可能な二人称代名詞が持つ働きかけの意味と談話展開の型の関係性が明らかになった。

<<口頭発表>> (3月18日 11:10-11:40)
【F棟3F F310教室】

会話に見る「また」の用法
—コミュニケーションの特性に応じた構文の発達—

堀内 ふみ野, 第十 早織, 浜田 啓志, 中山 俊秀

本研究では、自然会話における「また」の用法を、書き言葉の一つの典型である新聞での用法と比較しながら分析する。その結果として、次の三点を示す。第一に、会話には話し手の評価を表す用法(例:それがまた汚くて)が多く観察される。第二に、評価を表す用法は、指示表現との共起や音の弱化といった、特定の構造的・音韻的な特徴を持つ構文内で生起する。第三に、その構文の発達には、会話というコミュニケーション形態の特性が反映されている。つまり、客観的な情報伝達が重視される新聞に比べ、会話では主観的態度の表明が重要であり、その特性が会話に特徴的な「また」を含む構文の成立を動機づけていると考えられる。

<<口頭発表>> (3月18日 11:45-12:15)
【F棟3F F310教室】

メディアと場面に応じた英語定型表現の使い分け

土屋 智行

現代では、電話、メールなど、コミュニケーションの媒体としてのメディアが多様化している。その中で重要なトピックは、各メディアにおいて、主体がいかにして「流暢に」「効率よく」コミュニケーションをおこなっているかという点である。この「流暢性」の実現について、複数の要素をまとまりとして記憶する「定型性 formulaicity」が強く関わっていると主張されている。しかし、人がいつ、どのようなメディア・場面で定型表現を用いているのか等、明らかにすべき点が多くある。

本研究プロジェクトでは、(a) 英語話者のコミュニケーションをメディアごとに収録したデータベースを構築し、(b) そのデータを言語の定型性の観点から分析と考察している。本発表では、(a) については、データの収集と構築の方法を説明し、(b) については、使用される定型表現とその実態に関して、使用するメディアとコミュニケーション場面の観点から分析、考察する。

<<口頭発表>> (3月18日 10:00-10:30)
【F棟3F F311教室】

スタイルシフトにおける非デスマス形の指標的機能
—非デスマス形へのシフトは親しみを表すか—

岡崎 渉

デスマス形基調の会話における非デスマス形へのスタイルシフトは、従来多くの研究がなされてきた。だが、さまざまなバリエーションをもつ非デスマス形は、①常に親しみやフォーマリティの欠如といったポジティブ・ポライトネスを指標するものとして見なせるのか、②どのような談話機能を果たしているのか、という点の議論に乏しい。本研究では、デスマス形基調である初対面二者間の雑談(11組260分)をデータに用い、「指標性」(Indexicality)の観点からシフトされる非デスマス形の機能を検討した。その結果、非デスマス形は、談話展開を非主導的に進める手段、そして、ネガティブ・ポライトネスを表示する手段にもなり得ることがわかった。本発表では、非デスマス形へのシフトは、丁寧さやポライトネスによるのみでなく、聞き手目当て性、及び談話展開に対する参加者のスタンスという要因も関わった複合的な現象であることを主張する。

<<口頭発表>> (3月18日 10:35-11:05)

【F棟3F F311教室】

K-POPファンダムとコードスイッチング
—韓国女性アイドルグループ〈少女時代〉の東京ドーム公演における発話を通して—

鄭 孝俊

本発表は、日本におけるK-POPアイドルのコンサートで観察された発話のコードスイッチングについて研究するものである。研究対象は2014年12月9日に東京ドームで開催された韓国の女性アイドルグループ、〈少女時代〉の来日公演「GIRL'S GENERATION THE BEST LIVE at TOKYO DOME」であり、〈少女時代〉の各メンバーによって実践された日本語から韓国語へのコードスイッチングについて検討した。その結果、ファンのアイデンティティーを確立するためにコードスイッチングが行われていることが観察された。これはガンパズが指摘する「グループ内(in-group)とグループ外(out-group)の規範の明らかな区別」の実践であり、韓国語の使用でグループ内外を区別することによって強固な韓流ファンダムを実践する場を編成した、と考えられる。このような言語コミュニケーションのありようがK-POP人気を支える要因のひとつと言える。

<<口頭発表>> (3月18日 11:10-11:40)
【F棟3F F311教室】

LINEの会話における聞き手の行動
—相づちの分析から—

倉田 芳弥, 佐々木 泰子, 加納 なおみ, 楊 虹, 船戸 はるな

本研究は、LINEの会話における相づちの特徴を明らかにするため、相づちの機能、出現箇所、送信方法について調べた。その結果、「聞いている」機能は現れず、半数以上が「感情の表出」であった。非言語情報が欠落するLINEの会話では「感情の表出」を用いて積極的に話し手の発話に関わる様子が窺える。出現箇所を見ると、音声会話では見られないLINE独自の「自己発話後の相づち」が見られた。また、相づちを単独で送信する方法と、実質的発話と共に送信する方法は同程度であった。複数の発話連鎖が同時進行する際、発話連鎖を認識しやすいよう相づちを実質的発話と共に送信している可能性が考えられる。LINEの会話においても、即時的ではないが、聞き手として相手の発話を受け止めるという日本語による会話の普遍性が確認されるとともに、複数の発話連鎖が同時に進行するというLINEの特性により、音声会話では見られない独自性も観察された。

<<口頭発表>> (3月18日 11:45-12:15)

【F棟3F F311教室】

自閉症スペクトラム者との相互行為で用いられる解釈フレームについて
—初対面会話と対話者へのフォローアップインタビューの談話分析から—

合崎 京子

本発表は、自閉症スペクトラム(以下ASD)を持つ人(以下ASD者)とASDの症状を持たない人(以下、定型発達者)の相互行為におけるその会話の中で用いられたフレームについて、初対面会話の談話分析を行なうものである。分析では、定型発達者側が前提的に抱いているフレームがいかにも用いられているか、またどのような会話態度や発言内容といった形に具現化されるか例証を試みた。その結果、このやりとりは、両者の表情に顕著な対比がみられるいびつな相互行為となっていることが明らかとなった。以上から、定型発達者側が自らの前提知識により形成した「コミュニケーションが苦手な社会的弱者としてのASD者との会話」というフレームが意識もしくは無意識的にASD者の発話解釈に用いられていることが示唆された。さらにASD者が参与するコミュニケーションが対話者側の前提により歪められてしまう可能も考察された。

<<口頭発表>> (3月18日 10:00-10:30)
【F棟4F F414教室】

日豪における移動する人々の言語レパートリー調査
—社会ネットワークへの参加の文脈に焦点を当てて—

村岡 英裕, 倉田 尚美

本発表では、移民の言語レパートリーの多様性は彼らのこれまでの接触場面における言語管理(村岡・ファン・高, 2016)の蓄積の結果であるとの立場に立ち、そうした管理が、ネットワークへの参加の質、そこでの社会的役割、インターアクションを通して構築されるアイデンティティとどのように影響しあっているかを論じる。言い換えれば、接触場面における言語管理という移民それぞれの言語使用に関わる営みを、ホスト社会との接触という文脈において解釈することを試みたい。調査データは日本に住む外国人居住者9名とオーストラリアに住む日本人居住者5名を対象に2種類のインタビューによって収集した。調査の結果、調査協力者は言語レパートリーが発達したと自己評価するグループと停滞しているとするグループとに分かれ、2つのグループの社会的ネットワークへの参加等の違いが明らかになった。さらに日豪における相違と類似についても考察した。

<<口頭発表>> (3月18日 10:35-11:05)

【F棟4F F414教室】

フレーミングとフットィング理論から言語と自己形成の関連性を探る
—旧満洲国の日本人住民のアイデンティティ—

甲賀 真広

20世紀前半、旧満洲国は多民族社会であり、言語や文化の接触があった。そこで、本研究は、戦前の旧満洲国や大連で暮らしていた日本人を対象に聞き取り調査を行い、話者の自己形成と言語の関連性を探ることを目的とする。現在聞き取り調査が進んでいる3名の話者(X, Y, Z)のデータを分析する。分析方法としてGoffmanのframingおよびfootingという枠組みを用いた。その結果、彼らのアイデンティティと、自己形成における言語の関連性を垣間見ることができた。

①満洲国で暮らす自分は内地の「日本人」とは違うが、満洲国における自分はやはり「満人」ではなく「日本人」である

②話者XとYは現在でも、言語を非常に重要なものとして捉えていること、Zは過去の経験から立場の弱い人を今でも見捨てるはできない

話者の自己形成と言語との関係を探る場合、どのようなframeでどのようなfootingを選択するかということは有効な分析ツールであることが分かった。

<<口頭発表>> (3月18日 11:10-11:40)

【F棟4F F414教室】

商標の類否判断基準における質的データ分析(QDA)と形式概念分析(FCA)の統合的アプローチ

五所 万実

本研究は、商標登録の審査過程において、先行商標との類似・非類似を判断する際、どのような言語学的要因がはたらいているかを、質的データ分析(QDA)及び形式概念分析(FCA)の手法を用いて考察するものである。主に商標の登録可能性を審査(審判)する場面において問題となる、二つの比較する語の類否判断は、視覚的・聴覚的な情報や、観念想起性、語の一体性あるいは識別力等の諸要因を、総合的に勘案して行われることを明らかにしたい。本研究データは、特許庁情報プラットフォームで公開されている、先行商標との類否が争点となった審判の審決を年代別に収集したものである。分析方法としては、QDA支援ソフト「MAXQDA」を用いて当該文書に判断要素や観察手法等を詳細にコード付けし、通時的観点も含めてデータ解析を行った。さらにそのデータ解析のうちコード間関係を、FCA支援ソフト「Concept Explorer」に適用し、コード間の関係を視覚的にハッセ図で表した。

<<口頭発表>> (3月19日 13:00-13:30)
【F棟3F F303教室】

日本語と中国語における呼びかけ語の対照研究
—感情表出の調整に着目して—

楊 虹

本研究は、日本および中国の映画・ドラマ作品に見られる呼びかけ語の分析を通して、日本語と中国語における呼びかけ語の機能の共通点と相違点を示した。分析は、呼びかけ語の出現位置及び前後の会話の流れなどから、両言語の作品の原語における呼びかけ語の機能の分類を行い、機能と頻度の比較を行った。そのうえで、吹き替え版における呼びかけ語の訳出を対照して、訳出の脱落または追加の有無を分析した。分析の結果、呼びかけ語は、大きく①特定の発話行為の実現、②対話者の特定、③感情表出の調整という3タイプに分けられる。この3つのタイプの呼びかけ語について、日、中の作品の原語における生起頻度を比較した結果、日本語と比べ、中国語では、感情表出の調整機能の呼びかけ語の使用頻度が最も高いこと、また日本語では呼びかけ語が生起しない場面でも、中国語では、呼びかけ語を付加して感情表出の調整を行う場合があることが明らかになった。

<<口頭発表>> (3月19日 13:35-14:05)

【F棟3F F303教室】

中日両言語における慣習的間接発話行為の特徴に関する一考察
—不同意発話行為を中心に—

張麗

本研究では、相手のポジティブフェイスを侵害する不同意発話行為を中心に、中日両言語の慣習的間接発話行為の特徴を検討する。現実場面が設定されている13項目の談話完成テストを用いて、中国語母語話者と日本語母語話者それぞれ22名を対象に調査を行った。収集した中国語と日本語の計572個の不同意発話データを、ストラテジーごとにコーディングし、慣習的間接発話行為の認定を行った。中日両言語の慣習的間接発話行為の特徴を分析した結果、使用されているストラテジーは全体的に一致していたが、場面によっては差も見られた。中国語は「自分の提案の利点」を強調することや「自分の提案」をすることなどといった自分の意見を強化する不同意スタイルが見られ、日本語は「新情報の提示」を示すことによって相手に判断の不足を気づかせ、誘導する不同意スタイルが見られた。

<<口頭発表>> (3月19日 14:10-14:40)

【F棟3F F303教室】

中国人留学生と日本人学生の友人関係の談話にみる感謝ストラテジー

市原 明日香

感謝表現の異文化間の語用の差異は誤解の原因になるが、日本語と中国語の感謝談話の対照研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究は日本語と中国語のそれぞれの談話において、相互行為のやりとりに現れる感謝ストラテジーの種類と使用量を明らかにし、感謝の談話上の機能を示すことを目的とする。会話データは連続して複数のロールプレイを行うことにより感謝の文脈を共有するシーケンス・ロールプレイ方法で収集した。日本語母語話者ペア23組と中国語母語話者ペア28組のそれぞれの母語場面を録音録画して文字化した。分析の結果、中国語は「お返しの約束」と「関係継続の表明」ストラテジー、日本語は「感謝行為遂行的」と「ジェスチャー」が特徴的にみられた。中国語では場面によっては恩恵の種類や負担の重さを見積もって感謝を行うか否かを選択すること、日本語では「接触開始」の機能としての重要性が示唆された。

<<口頭発表>> (3月19日 14:45-15:15)

【F棟3F F303教室】

日本・韓国・中国の自己否定的な評価表出場面における会話展開に関する一考察

金 庚芬, 関崎 博紀, 趙 海城

本研究は、自己否定的な話題で進行する会話での進め方、及びそこから読み取れる志向性を明らかにすることを目的とする。日本、韓国、中国で、各言語の親友関係の母語話者同士の二者間会話を60組収集した。会話では、「面倒で後回しにしていること、苦手なこと、失敗談」の話題を提示し、話題の開始方法、聞き手の反応、話し手の発話に含まれる情報の量や質など、進行に際しての相互行為の観点から分析した。その結果、自己否定的な評価が表出される場面における日韓中の異なる志向性を指摘できる。日本語では、唐突で過度の侵害を避けられるよう、自己否定的な情報の開示を慎重に計りながら会話を展開していく志向性、韓国語では、相互に自己否定的な情報を提示し合い、一体感、同質感を演出する志向性、中国語では、自己否定的な評価や情報の提示自体は積極的に行われながら、むしろ提示された情報を打ち消すことで侵害を避けようとする志向性が窺がえる。

<<口頭発表>> (3月19日 13:00-13:30)
【F棟3F F310教室】

格助詞「に」で終わる新聞見出しについて

劉 吉香

新聞見出しは本文と違って、字数が限られ、その限られた字数の中で、簡潔にしかもなるべく誤解を与えないように記し、述語などの省略が多く見られる。助詞止めは新聞見出しの大きな特色だといえる。

本稿では助詞止めの新聞見出しの中によく現れる格助詞「に」で終わる新聞見出しに注目し、新聞見出しを止める「に」の特徴を明らかにしたい。研究方法としては、読売新聞のデータベースを利用し、読売新聞の2014年一年分の主見出しを取り出し、その中の格助詞「に」で終わる新聞見出しを考察対象としている。それについて、通常の文の格助詞「に」の使い方との比較、そして実例を挙げながら新聞見出しとその記事本文との比較を通し、新聞見出しを止める「に」の特徴を明らかにしたい。

<<口頭発表>> (3月19日 13:35-14:05)
【F棟3F F310教室】

日本語の述語における機能語の省略について

尹 盛熙

本発表の目的は、日本語における機能語の省略が話し言葉と書き言葉のテキストでどのように異なるか、形式的な違いを検証することである。「省略」とは、文あるいは発話において、復元可能と考えられる一部の成分が欠如する現象である。特に、名詞述語文におけるコピュラ「～だ」の省略や、サ変動詞の形式動詞「する」の省略などによって実現する統語的・形態的に不完全な述語が、新聞記事やテレビニュース、討論番組の発話といった様々な日本語テキストの間で異なる様相を呈することを指摘した上で、このような表現形式がもつ語用論的效果とその原因について考察する。さらに機能語の省略による不完全な述語の使用は、日本語において有効な省略方式であることも併せて述べる。

<<口頭発表>> (3月19日 14:10-14:40)
【F棟3F F310教室】

再帰構文の周辺例についての認知メカニズム

李 静

他動詞の再帰的用法における、典型的な再帰構文とそれほど典型的ではない構文が見られ、連続体とみなされる。典型的な構文を「プロトタイプ」、それほど典型的ではない構文を「周辺例」と呼ぶことにする。再帰構文プロトタイプは動作主は意図的に、自分からの働きかけが、最終的に動作主自身に戻ってき、動作主自身に変化が起こる。典型的な再帰構文を成り立つ要素は五つある:<意図>、<自身>、<行為>、<結果>、<責任>である。では、周辺例の場合はどうなるのか。つまり、五つの要素の中には、何かの要素が欠けているとしたら、「田中さんは虫歯を抜いた」のような周辺例をどう説明すればいいのか。本稿は先行研究を踏まえて、意味要素によって、集めた再帰構文の周辺例を5種類に分類し、認知言語学的なアプローチに基づき、それぞれの認知メカニズムを明らかにする。また、再帰構文のプロトタイプから周辺例への拡張プロセスを考察したい。

<<口頭発表>> (3月19日 14:45-15:15)
【F棟3F F310教室】

悪魔は細部に宿る
—構文認識の分散的手掛かりとしての英語冠詞から探る聞き手指向の文法論—

吉川 正人

非英語話者が、タクシーを呼んでもらおうと“Call me taxi.”と言ったところ“Taxi.”と言われるだけで呼んでもらえなかった、といった逸話が語られることがある。この場合本来は“Call me a taxi.”と言うべきであるが、このように、冠詞のようなあまり意味に貢献しないと思われる要素が文全体の構文認識に大きな影響を与えることがある。本発表では、英語における冠詞の配置は「定・不定」あるいは「既知・未知」といった意味・機能的な情報伝達よりも、表現全体の形式の認識、即ち「構文認識」に対する貢献が大きいことを示し、構文/文法という言語の形式的側面を、話し手/書き手と聞き手/読み手の実践の側面から見つめ直し、「聞き手/読み手指向の文法論」につなげることを目指す。

<<口頭発表>> (3月19日 13:00-13:30)
【F棟3F F311教室】

Japanese Diplomatic Discourse:
Speeches of Two Foreign Ministers

Chirasombutti Voravudhi

This research aims to examine discourse diplomacy in the speeches of Two foreign ministers. The objectives of this study are: 1) to analyze processes of Japanese discourse construction; 2) to investigate linguistic strategies; and 3) to analyze main Japanese ideologies. Two main discourses were found in the speeches. These are Assistance discourse and Peace discourse. Assistance discourse consists of two sub-discourses: Development and Human Security. The Peace discourse consists of two sub-discourses: Rule of Law and Peaceful Country. The diplomatic discourse in the speeches of Ministers of Foreign Affairs has an important function in creating images of Japan as a leader of the world in the field of human security. Another function is for the world community to understand the role and support that Japan has given to various countries economically. Rule of Law discourse which is the main Japanese ideology creating a secured and peaceful world is repetitively reproduced.

<<口頭発表>> (3月19日 13:35-14:05)
【F棟3F F311教室】

不満表明としての「皮肉・冗談」
—タイ日接触場面に注目して—

ウォンサミン スリーラット

本研究ではタイ日接触場面における不満表明会話に注目して、不満表明によって相手と対立する状況の中で、不満表明として「皮肉・冗談」がどう解釈可能であるか、その手がかりはどのようなものかを明らかにする。分析対象はタイ日日本語接触場面20組の会話データである。Gumperz(1982)、大津(2004)を参考に、会話データから「皮肉・冗談」連鎖の部分抜き出して分析した。今回のデータから観察された結果、「皮肉・冗談」を解釈可能とする手がかりは「現実に反する内容を表す発話の繰り返し」、「音調的調整」、「スピーチスタイルのシフト」、「母語の借用」、「笑い」の五つに分かれることが分かった。

<<口頭発表>> (3月19日 14:10-14:40)
【F棟3F F311教室】

日本の英語による対外情報発信の談話分析

山本 はるか

本発表は、日本の省庁が海外に向けて英語で発信するディスコースを批判的に分析し、言語政策とオーディエンスデザイン(Bell, 1984)の観点から論ずるものである。日本の省庁の英語版ウェブサイトの英語にはいわゆる官僚的な日本語ディスコースの特色が色濃く反映し、受信者よりも発信者志向のディスコースとなっていることが、パブリックディプロマシーの観点からもオーディエンスデザインの観点からも問題であることを、対照談話分析を通して指摘したい。また、現代社会における英語の様々なあり方から見たところの政府系の情報発信の英語、および英語によるディスコースの特質についてもふれたい。例えば、日本語の公文書に頻出する受け身表現や婉曲表現が反映された、迂言的で複雑な英語がみられる。また、日本語の情報構造を保持したまま英語に翻訳された文章も、英語母語話者には読みにくい英語として受け取られる傾向にある。

<<口頭発表>> (3月19日 14:45-15:15)

【F棟3F F311教室】

岡崎敬語調査に見る談話構成傾向の年齢層間差と経年変化

藏屋 伸子

本研究では、国立国語研究所によって実施された3回の岡崎敬語調査における反応文のデータについて、本題、理由等の談話機能要素による談話構成の傾向を調査次と年齢層ごと、及びそれらの差や経年変化について調査・分析した。

分析は大まかに、提示されるタイミングごとの談話機能要素の数と、談話機能要素を元の順序のまま単純になぎ合わせた組み合わせの2通りで行った。分析の結果、数の変化では成人後採用の典型ラインを示しているにも関わらず、全体上位の組み合わせでは、成人後採用とは逆の動きが見られた。成人後採用の様子は、下位の組み合わせの中に共通して多く提示されている談話機能要素や、組み合わせ数の変化率で確認できた。

結果として、上の年齢層ほど様々な談話機能要素を使いこなすようになり、逆に若年層は少ない数の決まった組み合わせを好むという二極化が進んでいることが分かった。

<<口頭発表>> (3月19日 13:00-13:30)
【F棟4F F414教室】

沈黙に対して参加者と研究者はどのように捉えているのか
—沈黙行為の解釈枠組みの構築に向けて—

種市 瑛

本研究は、語用実践行為論にもとづき、会話参加者と研究者が沈黙についてその行為者と行為自体をどのように解釈しているのかについて分析を行い、共通点と相違点、傾向を明らかにする。研究者(筆者)は収録した会話データに対する談話分析を行い、それをもとに沈黙の行為者と行為がどのように解釈されているのかについて分析した。また会話参加者による沈黙の解釈は、回顧インタビューで語られた内容をもとに検証した。その結果、個々の解釈者の間で沈黙の解釈とそれを導くための視点に相違があることが示された。ただし、沈黙者が誰かという問題や沈黙行為の働きについての解釈の枠組みは、会話参加者や研究者に関係なく、解釈者を取り囲む状況の中で、解釈のための視点を選ぶという点において共通していた。発表では具体例をあげながら説明を加え、個々の解釈者が沈黙行為と沈黙者をどのように捉えているのかについて提示する。

<<口頭発表>> (3月19日 13:35-14:05)
【F棟4F F414教室】

繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタイル
—日中韓母語話者の比較から—

荻原 稚佳子

日本語母語話者(JNS)の会話では習慣的・規範的に期待され使用されているやり取りの「①質問—②回答—③繰り返し」の連鎖が行われ、それが会話スタイルの一つになっている(荻原, 2015)という。

本研究では、この連鎖による会話スタイルが、中国語母語話者(CNS)、韓国語母語話者(KNS)の会話スタイルでもあるかを明らかにする。「①質問—②回答—③繰り返し」の連鎖と「①質問—②回答」の連鎖を比較し、どちらが楽しく盛り上がっていると感じ、どちらの話し方を自分がしていると認識し、相手に望むかについてJNSとCNS, KNSにアンケート調査した。

その結果、CNS, KNSはJNSとは異なる志向を持つ人が多く、JNSが同じ音調の繰り返しでリズム感を生み詩的余韻や共感、一体感を楽しむ「やまびこスタイル(echo style)」であるのに対し、CNSとKNSは無駄な繰り返しをせず、各発話に意図や内容を含んだ対応の「打ち返しスタイル(speak back style)」であることが分かった。

<<口頭発表>> (3月19日 14:10-14:40)

【F棟4F F414教室】

日・英語初対面会話における聞き手の関与戦略と会話構造の対照分析

岩田 祐子

本研究の目的は、日・英語初対面会話に見られるナラティブでは聞き手による関与戦略の種類と頻度と現れ方が異なり、それが英語会話と日本語会話の構造を違うものになっていることを明らかにすることである。英語会話では話し手のナラティブの途中で、聞き手によって様々な関与戦略がなされ、話し手と聞き手が協同してナラティブを構築している。日本語会話では、話し手のナラティブを聞き手があいづちを主として聞き、話し手がナラティブをモノローグ形式で語るが多く見られる。しかし、ナラティブの終結部において聞き手によって評価コメントやsecond storyが語られることで共感を示し、話し手のナラティブへの評価がなされる。また30分というある程度の長さの会話全体の中では後半に行くとともに、聞き手は徐々に先取り発話や声の引用戦略などの関与戦略を使うようになり、会話がよりインタラクティブになる。